

# 博士論文（要約）

論文題目 ヘルベルト・マルクーゼにおける  
管理社会批判の成立と展開

——労働国家とオートメーション・ユートピアをめぐって——

氏名 馬渡 玲欧

# 目次

凡例 .....	4
序章 .....	6
第1節 はじめに .....	6
第2節 先行研究の検討 .....	7
第1項 テクノロジー決定論者としてのマルクーゼ .....	7
第2項 エロスの解放論者としてのマルクーゼ .....	11
第3項 「労働と遊び」論の動向 .....	12
第3節 本稿のマルクーゼ像 .....	14
第4節 各章の構成 .....	16
第1章 1930年代初頭の「労働と遊び」論 .....	19
第1節 本章の課題 .....	19
第2節 歴史性と奉仕労働——ハイデガーとの対比 .....	22
第1項 歴史性 .....	22
第2項 奉仕労働 .....	28
第3節 「生命活動としての労働」論（1） .....	31
第1項 『ヘーゲル存在論』における生命概念 .....	31
(1) 「自己意識」としての生命 .....	32
(2) 「否定性」としての生命 .....	32
第2項 『ヘーゲル存在論』における労働概念 .....	34
(1) 「承認をめぐる闘争」としての労働 .....	36
(2) 「疎外」としての労働 .....	39
第4節 「生命活動としての労働」論（2） .....	41
第1項 マルクス『経済学・哲学草稿』をめぐって .....	42
第2項 マルクーゼの初期マルクス研究——疎外労働批判 .....	44
第3項 「経済学的労働概念の哲学的基礎」における「遊び」概念 .....	49
(1) 労働の対概念としての「遊び」 .....	49
(2) 対象の真の所有 .....	53
第5節 小括 .....	55
第2章 1930年代中盤の「労働と文化」論 .....	57
第1節 本章の課題 .....	57
第2節 文化によって人格が労働に服従する機制 .....	58
第1項 マルクーゼにおける肯定的文化 .....	59
(1) 肯定的文化とはなにか .....	59
(2) 肯定的文化とナショナリズム .....	62
第2項 肯定的文化による労働の管理 .....	64

第3節	ユンガーの労働国家論 .....	66
第1項	『労働者』の基本的図式 .....	67
第2項	労働国家における英雄文化の特徴 .....	69
第4節	快樂・幸福・空想に基づく新しい文化の可能性 .....	70
第1項	幸福と快樂の断念 (1) .....	71
第2項	幸福と快樂の断念 (2) .....	74
第3項	偶然性に基づく真の幸福 .....	76
第4項	現実を超越する空想 .....	78
第5項	空想と科学 .....	80
第5節	小括 .....	81
第3章	1940年代初頭の「労働とテクノロジー」論 .....	84
第1節	本章の課題 .....	84
第2節	生産テクノロジーとテクノクラシー .....	87
第3節	個人主義的理性から技術的合理性への変化 .....	90
第4節	旧い即事実性から新しい即事実性への変化 .....	92
第5節	製作本能と科学的管理法 .....	94
第1項	製作本能の抑圧 .....	94
第2項	科学的管理法の導入と労使協調路線 .....	96
第6節	ナチス・ドイツのテクノクラシー——合理性と非合理性 .....	99
第7節	テクノロジーに内在する解放の可能性 .....	101
第8節	小括 .....	103
第4章	1940年代中盤の「労働とテクノクラシー」論 .....	105
第1節	本章の課題 .....	105
第2節	フランクフルト学派と第二次世界大戦——戦争協力という側面 .....	106
第3節	国民社会主義の政治構造の特徴 .....	108
第1項	政治構造の特徴 (1)：党と国家の全体主義的アマルガム .....	108
第2項	政治構造の特徴 (2)：無定形性 .....	110
	(1) ドイツ国内の統制 .....	111
	(2) 植民地の統制 .....	112
第3項	政治構造の特徴 (3)：国家機構 .....	113
第4節	国民社会主義の経済構造の特徴 .....	114
第1項	経済構造の特徴 (1)：ドイツ・テクノクラート勃興の契機 .....	115
第2項	経済構造の特徴 (2)：プロイセン一掃の過程 .....	116
第3項	経済構造の特徴 (3)：誰がテクノクラートになるのか .....	118
第4項	経済構造の特徴 (4)：テクノクラートの中立性 .....	119
第5節	国民社会主義における労働者の統制 .....	121
第1項	労働者の統制 (1)：効率性・生産性の追求 .....	121
第2項	労働者の統制 (2)：労働組合の統制 .....	122

第3項	労働者の統制(3):衝動や能力の統制.....	123
第4項	労働者の統制(4):余暇・私生活の統制.....	125
第6節	小括.....	127
第5章	1950年代以降の「労働とオートメーション」論.....	130
第1節	本章の課題.....	130
第2節	オートメーション・ユートピアをめぐって.....	131
第1項	オートメーション・ユートピアへの批判.....	132
第2項	オートメーション・ユートピアへの擁護.....	133
第3節	「自由の領域と必然の領域」をめぐって.....	135
第1項	自由の領域と必然の領域.....	135
第2項	平田清明のマルクーゼ批判.....	138
第4節	マルクーゼ理論におけるオートメーション.....	141
第1項	『エロスと文明』におけるオートメーション.....	141
	(1) 生産性に対する批判.....	141
	(2) 「仕事原則」に対する批判.....	145
第2項	『ソビエト・マルクス主義』におけるオートメーション.....	148
第3項	『一次元的人間』におけるオートメーション.....	152
	(1) オートメーションへの批判.....	152
	(2) オートメーションへの擁護.....	154
第5節	小括.....	157
終章	.....	160
文献	.....	165
初出一覧	.....	179
謝辞	.....	180

本文

5年以内に出版予定。

## 文献

### A

- Abromeit, John, 2004, "Herbert Marcuse's critical encounter with Martin Heidegger 1927-33," John Abromeit and W. Mark Cobb eds., *Herbert Marcuse: A critical reader*, New York: Routledge, 131-51.
- , 2005, "Glossary," Richard Wolin and John Abromeit eds., *Heideggerian Marxism*, Lincoln and London: University of Nebraska Press, 177-89.
- Adorno, Theodor W., 1941, "Veblen's Attack on Culture," *STUDIES IN PHILOSOPHY AND SOCIAL SCIENCE*, 6(1): 389-413. (= 1995, 渡辺祐邦・三原弟平訳「ヴェブレンの文化攻撃」『プリズメン』筑摩書房, 99-136.)
- , 1964, *Jargon der Eigentlichkeit: Zur deutschen Ideologie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1992, 笠原賢介訳『本来性という隠語——ドイツ的なイデオロギーについて』未来社.)
- Agger, Ben, 1976, "Marcuse & Habermas on New Science," *Polity* 9(2): 158-81.
- 赤塚弘之, 2008, 「1925年におけるハイデガーの歴史に関する考察とディルタイの受容の問題」『上智哲学誌』20: 47-61.
- Alford, C. Fred, 1985, *Science and the Revenge of Nature: Marcuse & Habermas*, Tampa: University of South Florida Press.
- 鯨坂真・有尾善繁・鈴木茂編, 1978, 『ヘーゲル論理学入門』有斐閣.
- 赤石憲昭, 2007, 「ホネットの批判的社会理論の批判性——現代における労働と承認の問題圏」『情況』2007 11・12号, 134-59.
- 荒川幾男, 1970, 『管理社会』講談社.
- Árnason, Jóhann Páll, 1971, *Von Marcuse zu Marx: Prolegomena zu einer dialektischen Anthropologie*, Neuwied und Berlin: Hermann Luchterhand Verlag.

### B

- Bergmann, Joachim, 1968, "Technologische Rationalität und spätkapitalistische Ökonomie," Jürgen Habermas hrsg., *Antworten auf Herbert Marcuse*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 89-103.
- Boltanski, Luc et Ève Chiapello, 1999, *Le nouvel esprit du capitalisme*, Paris: Gallimard. (=2013, 三浦直希他訳『資本主義の新たな精神』下, ナカニシヤ出版.)
- Bolz, Norbert, 1989, *Auszug aus der entzauberten Welt: Philosophischer Extremismus zwischen den Weltkriegen*, München: Wilhelm Fink Verlag. (=1997, 山本尤・大貫敦子訳, 『批判理論の系譜学——両大戦間の哲学的過激主義』法政大学出版局.)

### D

- Deen, Philip, 2010, "Dialectical vs. Experimental Method: Marcuse's Review of Dewey's Logic: The Theory of Inquiry," *Transactions of the Charles S. Peirce Society*, 46(2): 242-57.
- 出口剛司, 2002a, 『エーリッヒ・フロム——希望なき時代の希望』新曜社.
- , 2002b, 「革命的個人主義と六八年のマルクーゼ——唯物論的ニヒリズムの社会的構想力」唯物論研究協会編『唯物論研究年誌 第七号』青木書店, 178-200.

———, 2010, 「アクセル・ホネットの承認論と批判理論の刷新——批判理論はネオリベリズムの変革をどう批判するのか」『現代社会学理論研究』4: 16-28.

———, 2016, 「栗原社会学における社会意識の構成と自明性による支配——戦後日本における管理社会論の展開」『情報コミュニケーション学研究』16: 1-15.

Demirović, Alex, 1999, *Der nonkonformistische Intellektuelle: Die Entwicklung der Kritischen Theorie zur Frankfurter Schule*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2009, 出口剛司訳『非体制順応的知識人——批判理論のフランクフルト学派への発展 第二分冊 戦後ドイツの学生運動とフランクフルト学派』御茶の水書房.)

Diebold, John, 1952, *Automation: The Advent of the Automatic Factory*, New York: D. Van Nostrand. (= 1957, 中島正信・渡辺真一訳『オートメーション』中央経済社.)

土井理代, 1998, 「前期ハイデガーにおける時間性と歴史性」『メタフュシカ』29: 101-12.

## E

Elliott, Anthony, 2014, *Contemporary Social Theory: An Introduction Second Edition*, Routledge.

## F

Feenberg, Andrew, 1988, "The Bias Of Technology", Robert Pippin, Andrew Feenberg, and Charles P. Weibel eds., *Marcuse: Critical Theory and the Promise of Utopia*, Massachusetts: Bergin and Garvey Publishers, 225-56.

———, 1999, *Questioning Technology*, London: Routledge. (= 2004, 直江清隆訳『技術への問い』岩波書店.)

———, 2005, *Heidegger and Marcuse: the Catastrophe and Redemption of History*, New York: Routledge.

Forman, Michael, 2017, "Marcuse in the Crisis of Neoliberal Capitalism: Revisiting the Occupation," Lamas, Andrew T., Wolfson, Todd and Peter N. Funke, eds., *The Great Refusal: Herbert Marcuse and Contemporary Social Movements*, Philadelphia: Temple University Press, 29-54.

Fourier, C., 1829, *Le nouveau monde industriel et sociétaire, ou, Invention du procédé d'industrie attrayante et naturelle distribuée en séries passionnées*, Bossange père. (=1975, 田中正人訳「産業的協同社会的な新世界——つまり、情念系列のうちに配分された、魅力的自然的産業の方法の発見」五島茂・坂本慶一責任編集『世界の名著 続八 オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社、437-537.)

Fowler, Bridget, 2014, "Figures of Descent from Classical Sociological Theory: Luc Boltanski," Simon Susen, Bryan S. Turner, eds., *The Spirit of Luc Boltanski: Essays on the 'Pragmatic Sociology of Critique'*, London: Anthem Press, 67-88.

Freud, Sigmund, [1920] 1998, "Jenseits des Lustprinzips," Freud, Anna und Edward Bibring, Wilhelm Hoffer, Ernst Kris, Otto Isakower hrsg., *Gesammelte Werke XIII*, Frankfurt am Main: S.Fischer, 4-69. (=2006, 須藤訓任訳「快原理の彼岸」『フロイト全集 17巻』岩波書店, 55-125.)

———, [1930] 1991, "Das Unbehagen in der Kultur," Freud, Anna und Edward Bibring, Wilhelm Hoffer, Ernst Kris, Otto Isakower hrsg., *Gesammelte Werke XIV*, Frankfurt am Main: S.Fischer, 422-506. (=

- 2011, 高田珠樹・嶺秀樹訳「文化の中の居心地悪さ」『フロイト全集 20 巻』岩波書店, 65-162. )
- 藤井陽一, 2010, 「ポスト・スターリン期におけるソヴィエト倫理学の変容について」『ロシア・東欧研究』39: 57-69.
- 藤野寛, 2001, 「アドルノの文化理論」『高崎経済大学論集』43(4): 41-54.
- 船戸満之, 2002, 『表現主義論争とユートピア』情況出版.

## G

- Geoghegan, Vincent, 1981, *Reason & Eros: The Social Theory of Herbert Marcuse*, London: Pluto Press.
- 五郎丸仁美, 2004, 『遊戯の誕生——カント、シラー美学から初期ニーチェへ』国際基督教大学比較文化研究会.
- 五島茂・坂本慶一, 1975, 「ユートピア社会主義の思想家たち」五島茂・坂本慶一責任編集『世界の名著 続八 オウエン サン・シモン フーリエ』中央公論社, 5-96.

## H

- Habermas, Jürgen, 1968, *Technik und Wissenschaft als >Ideologie<*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= [1970]2000, 長谷川宏訳『イデオロギーとしての技術と科学』平凡社.)
- , [1968]1973, *Erkenntnis und Interesse*, Frankfurtam Main: Suhrkamp. (=1981, 奥山次良他訳『認識と関心』未来社.)
- , [1981] 1987, *Philosophisch-politische Profile*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1986, 小牧治・村上隆夫訳『哲学的・政治的プロフィール——現代ヨーロッパの哲学者たち 下』未来社.)
- 速水淑子, 2015, 『トーマス・マンの政治思想——失われた市民を求めて』創文社.
- 早野禎二, 1991, 「ホルクハイマー批判理論における幸福概念の検討」『名古屋大学社会学論集』12.
- 早瀬明, 1994, 「啓蒙の限界性を巡るヘーゲルの歴史哲学的思索——『精神現象学』と『啓蒙の弁証法』の比較」上妻精他編『ヘーゲル——時代を先駆ける弁証法』情況出版, 249-63.
- 林直道, 1971, 『史的唯物論と経済学 下巻』大月書店.
- Heidegger, Martin, [1930] 1980, *Hegels Phänomenologie des Geistes (Gesamtausgabe / Martin Heidegger, Abt. 2. Vorlesungen 1923-1944 ; Bd. 32)*, Frankfurt am Main: V. Klostermann. (=1987, 藤田正勝・アルフレド・グッツオーニ訳『ハイデッガー全集 第32巻 第2部門 講義(1919-44) ヘーゲル『精神現象学』』創文社.)
- , 1933, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität. Rede gehalten bei der feierlichen Übernahme des Rektorats der Universität Freiburg*, Breslau: W.G.Korn Verlag. (= [1976] 1999, 清水多吉他訳「ドイツの大学の自己主張」『30年代の危機と哲学』平凡社, 101-26.)
- Hendrick, I., 1943, "Work and the Pleasure Principle," *The Psychoanalytic Quarterly*, 12(3): 311-329.
- Herf, Jeffrey, 1984, *Reactionary Modernism: Technology, Culture, and Politics in Weimar and the Third Reich*, Cambridge University Press. (=1991, 中村幹雄・谷口健治・姫岡とし子訳, 『保守革命とモダニズム——ワイマール・第三帝国のテクノロジー・文化・政治』岩波書店.)
- Herzog, Dagmar, 2005, *Sex after Fascism: Memory and Morality in Twentieth-Century Germany*, Princeton:



- Princeton University Press. (=2012, 川越修・田野大輔・荻野美穂訳, 『セックスとナチズムの記憶——二〇世紀ドイツにおける性の政治化』岩波書店.)
- 東口豊, 2005, 「Th・W・アドルノにおける『幸福の約束』」『哲学年報』64: 69-92.
- 日暮雅夫, 2014, 「フランクフルト学派における『市民社会』の問題——ハーバーマスとホネット」日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』20: 45-54.
- , 2016, 「労働・承認・闘争——アクセル・ホネットの『労働と承認』論」田中拓道編『承認——社会哲学と社会政策の対話』法政大学出版局, 131-56.
- 平田清明, 1969, 『市民社会と社会主義』岩波書店.
- , 1975, 「個体的所有概念との出会い——労働と所有のディアレクティーク——覚え書(上)」『思想』617:103-25.
- , 1978, 「マルクスにおける生産諸力の概念について(1) ——生産力の弁証法」『経済論叢』122(5-6): 217-38.
- Honneth, Axel, [1985] 1989, *Kritik der Macht: Reflexionsstufen einer kritischen Gesellschaftstheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=1992, 河上倫逸監訳, 『権力の批判——批判的社会理論の新たな地平』法政大学出版局.)
- , 1992, *Kampf um Anerkennung: Zur moralischen Grammatik sozialer Konflikte*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2003, 山本啓・直江清隆訳, 『承認をめぐる闘争——社会的コンフリクトの道徳的文法』法政大学出版局.)
- , 1995, *The Fragmented World of the Social: Essays in Social and Political Philosophy*, State University of New York Press.
- , 2010, *Das Ich im Wir: Studien zur Anerkennungstheorie*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (=2017, 日暮雅夫・三崎和志・出口剛司・庄司信・宮本真也訳『私たちのなかの私——承認論研究』法政大学出版局.)
- 堀内進之介, 2011, 「承認論の可能性と限界——ホネットの批判理論の検討を通じて」『社会学論考』32: 29-54.
- Horkheimer, Max, 1936, "Allgemeiner Teil," *Studien über Autorität und Familie*, Paris: F. Alcan. (=1994, 森田数実編訳, 「権威と家族」『批判的社会理論——市民社会の人間学』恒星社厚生閣, 1-91.)
- , 1937, "Traditionelle und kritische Theorie," *Zeitschrift für Sozialforschung*, 6(2): 245-94. (=1974, 久野収訳「伝統的理論と批判的理論」『哲学の社会的機能』晶文社, 36-102.)
- , 1941, "Preface," *STUDIES IN PHILOSOPHY AND SOCIAL SCIENCE*, 6(1): 365.
- , 1947, *Eclipse of Reason*, New York: Oxford University Press. (=1987, 山口祐弘訳, 『理性の腐蝕』せりか書房.)
- und T. W. Adorno, 1947, *Dialektik der Aufklärung*, Querido Verlag. (= [1990] 2007, 徳永恂訳『啓蒙の弁証法』岩波書店.)
- und Herbert Marcuse, 1937, "Philosophie und Kritische Theorie," *Zeitschrift für Sozialforschung*, 6(3): 625-47. (=1969, 田窪清秀ほか訳「哲学と批判的理論」『文化と社会(上)』せりか書房, 147-82.) (=1974, 久野収訳「哲学と批判的理論」『哲学の社会的機能』晶文社, 103-13.)
- 星加良司, 2011, 「障害者は『完全な市民』になりえるか?」松井彰彦・川島聡・長瀬修編著『障害

を問い直す』東洋経済新報社, 229-57.

細谷昂他, 1980, 『マルクス経済学・哲学草稿』有斐閣.

## I

市井吉興, 2000, 「文明化過程としての社会構成——ノルベルト・エリアスの社会学的想像力」『立命館産業社会論集』35(4): 13-35.

Iggers, Georg G., 1975, *New directions in European historiography*, Connecticut: Wesleyan University Press.

(=1986, 中村幹雄他訳, 『ヨーロッパ歴史学の新潮流』晃洋書房.)

池田浩士, 2019, 『ボランティアとファシズム——自発性と社会貢献の近現代史』人文書院.

池田喬, 2014, 「事実性の解釈学——初期フライブルク期という『道』」秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』法政大学出版局, 17-26.

生松敬三, [1968] 2002, 『社会思想の歴史——ヘーゲル・マルクス・ウェーバー』岩波書店.

今村仁司, 1988, 『仕事』弘文堂.

———・座小田豊, 2004, 『知の教科書 ヘーゲル』講談社.

稲上毅, 2013, 『ヴェブレンとその時代——いかに生き、いかに思索したか』新曜社.

Immanen, Mikko, 2018, "Revisiting Marcuse's "Habilitation Odyssey" in the Light of Heidegger's "Black Notebooks", *New German Critique*, 45(3): 129-54.

石田教子, 2014, 「ヴェブレンの進化論的経済学における機械論の位置」『経済集志』84(3): 233-250.

## J

Jay, Martin, 1973, *The Dialectical Imagination: A History of the Frankfurt School and the Institute of Social Research 1923-1950*, Boston: Little Brown and Company. (=1975, 荒川幾男訳, 『弁証法的想像力——フランクフルト学派と社会研究所の歴史 一九二三-一九五〇』みすず書房.)

Jünger, Ernst, [1932] 1981, *Der Arbeiter: Herrschaft und Gestalt*, Hanseatische Verlagsanstalt, Stuttgart: Klett-Cotta. (=2013, 川合全弘訳, 『労働者——支配と形態』月曜社.)

## K

鍋木政彦, 2002, 『ヴィルヘルム・ディルタイ——精神科学の生成と歴史的啓蒙の政治学』九州大学出版会.

柿木伸之, 1999, 「救出と反復——ベンヤミンとハイデガーの歴史についての思考」『哲学』50: 263-73.

韓立新, 2001, 『エコロジーとマルクス——自然主義と人間主義の統一』時潮社.

金子武蔵, [1973] 1996, 『ヘーゲルの精神現象学』筑摩書房.

鹿島徹, 2002, 「歴史性再考——ハイデガー『存在と時間』第二篇第五章を読む」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第1分冊』48: 3-20.

Kätz, Barry, 1982, *Herbert Marcuse and the Art of Liberation: an Intellectual Biography*, London: Verso.

片山善博, 1997, 「「精神現象学」「自己意識」章における<生命>の意義」『一橋研究』22(1): 139-151.

加藤尚武編, 2012, 『ヘーゲル「精神現象学」入門』講談社.

- 川合全弘, 1988, 「ドイツ市民文化と民主主義 (一) ——エルンスト・ユンガーの『労働者』『産大法学』21 (3) : 1-21.
- 川瀬泰史, 1997, 「ナチス近代化論争」『立教経済学研究』50(4): 39-61.
- 茅野良男, 1974, 「ハイデガーと歴史性の問題」『理想』488: 66-80.
- Kellner, Douglas, 1984, *Herbert Marcuse and the Crisis of Marxism*, London: Macmillan.
- 木前利明, 1994, 「批判理論と知の可能性——ホルクハイマーと全体性の放棄」『岩波講座 現代思想 8 批判理論』岩波書店, 43-76.
- 木村雅則, 2010, 「スターリン体制の制度的配置と再生産メカニズム——1930年代国営工業を中心に」『比較経済研究』47(1): 1-14.
- King, Richard, 1972, *The Party of Eros*, Dell Publishing. (=1978, 中山容・渡辺潤訳『エロスの社会学——現代アメリカのラディカル思想』新泉社.)
- 清真人, 1991, 「マルクーゼにおける実存的思考の軌跡 (二)」『青踏女子短期大学紀要』14: 73-108.
- 今防人, 2009, 「コミュニケーションはどこへ行ったのか？」岩崎稔・上野千鶴子・北田暁大・小森陽一・成田龍一編著『戦後日本スタディーズ 2 60・70年代』紀伊國屋書店, 185-200.
- 近藤真, 1985, 「オットー・キルヒハイマーの国法思想と西ドイツの『批判的法理論』——オットー・キルヒハイマー生誕80周年、没後20周年の記念のために」『岐阜大学教養部研究報告』21: 268-247.
- Krockow, Christian Graf von, [1958] 1990, *Die Entscheidung: eine Untersuchung über Ernst Jünger, Carl Schmitt, Martin Heidegger*, Frankfurt: Campus Verlag. (=1999, 高田珠樹訳『決断——ユンガー、シュミット、ハイデガー』柏書房.)
- クチンスキー, ユルゲン, 良知力・小川徹, 1970, 『労働の歴史——棍棒からオートメーションへ』法政大学出版局.
- 熊野純彦, 1994, 「ヘーゲル他者論の射程」上妻精他編『ヘーゲル——時代を先駆ける弁証法』情況出版, 264-81.
- 栗原彬, 1982, 『管理社会と民衆理性——日常意識の政治社会学』新曜社.

## L

- Laudani, Raffaele eds., 2013, *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press.
- Lind, Peter, 1985, *Marcuse and Freedom*, London: Croom Helm.
- Löwith, Karl, 1941, *Von Hegel zu Nietzsche: der revolutionäre Bruch im Denken des neunzehnten Jahrhunderts*, Zürich: Europa-Verlag. (=2016, 三島憲一訳, 『ヘーゲルからニーチェへ——十九世紀思想における革命的断絶 下』岩波書店.)

## M

- Mann, Floyd C. and L. Richard Hoffman, 1960, *Automation and the Worker: A Study of Social Change in Power Plants*, New York: Holt. (=1961, 広野良吉訳『労働とオートメーション』日本能率協会.)
- Marcuse, Herbert, [1932a] 2004, *Hegels Ontologie und die Grundlegung einer Theorie der Geschichtlichkeit*,

- Frankfurt am Main: Verlag Vittorio Klostermann. (=1980, 吉田茂芳訳『ヘーゲル存在論と歴史性の理論』未来社. )
- , 1932b, "Neue Quellen zur Grundlegung des historischen Materialismus," *Die Gesellschaft*, 9: 136-74. (=1968, 良知力訳「経済学＝哲学手稿の解釈——史的唯物論の基礎づけのための新史料」『初期マルクス研究——『経済学＝哲学手稿』における疎外論』未来社, 5-90. )
- , 1933, "Über die philosophischen Grundlagen des wirtschaftswissenschaftlichen Arbeitsbegriffs," *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*, 69(3), 257-92. (=1968, 良知力訳「経済学的労働概念の哲学的基礎」『初期マルクス研究——『経済学＝哲学手稿』における疎外論』未来社, 91-157. )
- , 1934, "Der Kampf gegen den Liberalismus in der totalitären Staatsauffassung," *Zeitschrift für Sozialforschung*, 3(2): 161-94. (= 1969, 田窪清秀ほか訳「全体主義国家観におけるリベラリズムとの闘争」『文化と社会 (上)』せりか書房, 23-82. )
- , 1937, "Über den affirmativen Charakter der Kultur," *Zeitschrift für Sozialforschung*, 6(1): 54-94. (=1969, 田窪清秀ほか訳「文化の現状肯定的性格について」『文化と社会 (上)』せりか書房, 83-146. )
- , 1938, "Zur Kritik des Hedonismus," *Zeitschrift für Sozialforschung*, 7(1-2): 55-89. (=1969, 田窪清秀ほか訳「快樂説批判」『文化と社会 (上)』せりか書房, 185-238. )
- , [1939] 2011, "Review of John Dewey's Logic: The Theory of Inquiry," Douglas Kellner and Clayton Pierce eds., *Philosophy, Psychoanalysis and Emancipation: Collected Papers of Herbert Marcuse Volume Five*, New York: Routledge, 80-7.
- , 1941, "Some Social Implications of Modern Technology," *Studies in Philosophy and Social Science*, 6(1): 414-39.
- , [1941] 1954, *Reason and Revolution: Hegel and the Rise of social Theory*, New York: The Humanities Press. (=1961, 榊田啓三郎・中島盛夫・向來道夫訳『理性と革命——ヘーゲルと社会理論の興隆』岩波書店. )
- , [1941] 2011, "Critique of Dewey's Theory of Valuation," Douglas Kellner and Clayton Pierce eds., *Philosophy, Psychoanalysis and Emancipation: Collected Papers of Herbert Marcuse Volume Five*, New York: Routledge, 87-92.
- , [1942] 1998, "State and Individual under National Socialism," Douglas Kellner ed., *Technology, War and Fascism: Collected Papers of Herbert Marcuse Volume One*, London and New York: Routledge, 67-92.
- , [1943a] 2013, "Possible Political Changes in Nazi Germany in the Near Future", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 31-7.
- , [1943b] 2013, "Changes in the Reich Government", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 38-47.
- , [1943c] 2013, "German Social Stratification", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi*

- Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 74-91.
- , [1943d] 2013, "Morale in Germany", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 100-5.
- , [1944a] 2013, "Dissolution of the Nazi Party and its Affiliated Organizations", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 253-63.
- , [1944b] 2013, "Policy toward Revival of Old Parties and Establishment of New Parties in Germany", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 285-300.
- , [1945] 2013, "Nazi Plans for Dominating Germany and Europe: The Nazi Master Plan", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 475-521.
- , [1948] 1965, "Existentialismus. Bemerkungen zu Jean Paul Sartres *L'Être et le Néant*," *Kultur und Gesellschaft II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 49-84. (= 1972, 田窪清秀ほか訳「ジャン＝ポール・サルトル著、『存在と無』のための覚え書」『文化と社会（下）』せりか書房, 83-146. )
- , [1955] 1956, *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, London : Routledge & Kegan Paul. (= 1958, 南博訳『エロスの文明』紀伊國屋書店. )
- , [1958] 1960, *Soviet-Marxism: A Critical Analysis*, New York: Columbia University Press. (= 1971, 片岡啓治訳『工業社会とマルクス主義——ソヴェト・マルクス主義批判』林書店.
- , 1964, *One-Dimensional Man: Studies in the Ideology of Advanced Industrial Society*, Boston: The Beacon Press. (= 1973, 生松敬三・三沢謙一訳『一次元的人間——先進産業社会のイデオロギーの研究』河出書房新社. )
- , 1965a, *Kultur und Gesellschaft II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1972, 井上純一ほか訳『文化と社会（下）』せりか書房. )
- , 1965b, "Industrialisierung und Kapitalismus im Werk Max Webers," *Kultur und Gesellschaft II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1972, 井上純一ほか訳「マックス・ウェーバーの著作における産業化と資本主義」『文化と社会（下）』せりか書房, 155-92. )
- , 1965c, "Bemerkungen zu einer Neubestimmung der Kultur," *Kultur und Gesellschaft II*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1972, 井上純一ほか訳「文化の新しい定義についての覚え書」『文化と社会（下）』せりか書房, 225-58. )
- , 1967, *Das Ende der Utopie*, Verlag Maikowski. (= 1968, 清水多吉訳『ユートピアの終焉——過剰 抑圧 暴力』合同出版.)
- , 1969, "The Realm of Freedom and The Realm of Necessity: A Reconsideration," Ernst Bloch, *Marx und die Revolution*, Frankfurt am Main: Suhrkamp. (= 1972, 花崎皋平訳「自由と必然——あたらしい規定のための注釈」『マルクスと革命』紀伊國屋書店, 13-25. )
- and Felix Gilbert, [1943] 2013, "The Significance of Prussian Militarism for Nazi Imperialism:

- Potential Tensions in United Nations Psychological Warfare", Laudani, Raffaele eds., *Secret Reports on Nazi Germany: The Frankfurt School Contribution to the War Effort*, Princeton and Oxford: Princeton University Press, 61-73.
- Marcuse, Peter, 2017, "Occupying and Refusing Radically: The Deprived and the Dissatisfied Transforming the World," Lamas, Andrew T., Wolfson, Todd and Peter N. Funke, eds., *The Great Refusal: Herbert Marcuse and Contemporary Social Movements*, Philadelphia: Temple University Press, 66-79.
- Marx, Karl, 1844, *Ökonomisch-philosophische Manuskripte*. (= 1964, 城塚登・田中吉六訳, 『経済学・哲学草稿』岩波書店.)
- Marx, Karl, [1857-8] 1953, *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf): 1857-1858, Anhang 1850-59*, Dietz Verlag. (= 高木幸二郎監訳, 1961, 『経済学批判要綱(草案)——1857-1858年 第三分冊』大月書店)
- , 1867-94, *Das Kapital*, Hamburg: O. Meissner. (= 1969-70, 向坂逸郎訳『資本論』岩波書店. なお論文中では底本 1867 年、翻訳 1969 年の第 3 巻、及び底本 1894 年、翻訳 1970 年の第 9 巻を参照.)
- Meynaud, Jean, 1964, *La Technocratie*, Paris: Editions Payot. (= 1973, 壽里茂訳, 『清水幾太郎責任編集 現代思想 5 テクノクラシー』ダイヤモンド社.)
- 三浦秀春, 1972, 「ハイデガーとマルクーゼにおける決意性の問題」『東洋大学紀要 文学部篇』25: 15-32.
- 水上英徳, 2005, 「労働と承認——ホネット承認論の視角から」『社会学研究』78: 73-94.
- , 2017, 「アクセル・ホネットの個人化論——自己実現の個人主義と承認のイデオロギー」『松山大学論集』29(1): 231-72.
- 三島憲一, 1991, 『戦後ドイツ——その知的歴史』岩波書店.
- Moore, Duston, 2007, "Whitehead and Marcuse: The Great Refusal, Universals and Rational Critical Theories," *Journal of Classical Sociology*, 7(1): 83-108.
- 森一郎, 2008, 「労働のゆくえ——『ハイデガーからアーレントへ』の途上」千田義光・久保陽一・高山守『講座 近・現代ドイツ哲学III ハイデッガーと現代ドイツ哲学』理想社, 43-75.
- , 2018, 「労働という基礎経験——ハイデガーと三木清」『現代思想』46(3): 295-314.
- 森貴史, 2018, 『踊る裸体生活——ドイツ健康身体論とナチスの文化史』勉誠出版.
- 森田数実, 2000, 『ホルクハイマーの批判的理論』恒星社厚生閣.
- , 2003, 「ホルクハイマーの批判的人間学(2)」『東京学芸大学紀要 第 3 部門 社会科学』54: 159-176.

## N

- 中山茂, 1981, 『科学と社会の現代史』岩波書店.
- , 1994, 「技術制度化の思想史」『岩波講座 現代思想 13 テクノロジーの思想』岩波書店, 213-37.
- 直江清隆, 2014, 「思想史における技術」『社会思想史研究』38: 24-42.
- Neumann, Franz, 1942, *Behemoth: the structure and practice of national socialism*, London: Victor Gollancz.

(=1963, 岡本友孝・小野英祐・加藤栄一訳, 『ビヒモス——ナチズムの構造と実際』みすず書房.)

野田宣雄, 1997, 『ドイツ教養市民層の歴史』講談社.

野尻洋平, 2017, 『監視社会とライアンの社会学——プライバシーと自由の擁護を越えて』晃洋書房.

## O

Offe, Claus, 1968, "Technik und Eindimensionalität: Eine Version der Technokratiethese?," Jürgen Habermas hrsg., *Antworten auf Herbert Marcuse*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag, 73-88.

小原敬士, 1965, 『ヴェブレン』勁草書房.

Ocay, Jeffrey, 2008, "Heidegger, Hegel, Marx: Marcuse and the Theory of Historicity," *Kritike*, 2(2): 46-64.

奥村隆, 2003, 「文明化と暴力の社会理論——ノルベルト・エリアスの問いをめぐって」東京大学人文社会系研究科博士論文.

表弘一郎, 2013, 『アドルノの社会理論——循環と偶然性』白澤社.

小野清美, 1996, 『テクノクラートの世界とナチズム——「近代超克」のユートピア』ミネルヴァ書房.

——, 2004, 『保守革命とナチズム——E・J・ユングの思想とワイマル末期の政治』名古屋大学出版会.

小野紀明, 1994, 『現象学と政治——二十世紀ドイツ精神史研究』行人社.

小野寺研太, 2015, 『戦後日本の社会思想史——近代化と「市民社会」の変遷』以文社.

小野寺拓也, 2009, 「危機的状況に現れる「真の顔」——第二次大戦末期のドイツ社会・国防軍をめぐる近年の研究から」『ヨーロッパ研究』8: 173-184.

大河内泰樹, 2010, 「コミュニケーション・承認・労働——A・ホネットにおける批判的社会理論の準拠点」『唯物論と現代』45: 58-71.

大野英二, 2001, 『ナチ親衛隊知識人の肖像』未来社.

大沢正道, 1975, 『遊戯と労働の弁証法』紀伊國屋書店.

小田部胤久, 2014, 「カント『判断力批判』における「構想力」と「内官」再考——感性論としての美学への一つの寄与」『美学』65(2): 1-12.

尾関周二, 1989, 『言語的コミュニケーションと労働の弁証法——現代社会と人間の理解のために』大月書店.

## P

Plessner, Helmuth, [1935] 1959, *Die verspätete Nation : über die politische Verführbarkeit bürgerlichen Geistes*, Stuttgart: Kohlhammer. (=松本道介訳, 1995, 『ドイツロマン主義とナチズム——遅れてきた国民』講談社.)

## R

良知力, 1971, 『初期マルクス試論——現代マルクス主義の検討とあわせて』未来社.

- Ringer, Fritz K., 1969, *The decline of the German mandarins: the German academic community, 1890-1933*, Cambridge: Harvard University Press. (=1991, 西村稔訳『読書人の没落——世紀末から第三帝国までのドイツ知識人』名古屋大学出版会.)
- Robinson, Paul A., 1969, *The Freudian Left: Wilhelm Reich, Geza Roheim, Herbert Marcuse*, New York: Harper. (=1983, 平田武靖訳『フロイト左派——ライヒ ローハイム マルクーゼ』せりか書房.)
- Rose, N. 1999 *Governing the Soul: The Shaping of the Private Self, (Second Edition)*, Free Association Books. (=2016, 堀内進之介・神代健彦監訳『魂を統治する——私的な自己の形成』以文社.)

## S

- 斎藤幸平, 2019, 『大洪水の前に——マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版.
- 齋藤元紀, 2007, 「ハイデガーとニーチェ——『存在と時間』における《思考の経験》をめぐって」『国士館哲学』11: 11-29.
- , 2014, 「カントの現象学的解釈——超越論的時間地平の発見」秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』法政大学出版局, 37-46.
- , 2016, 「ハイデガー——労働の存在論」『POSSE』31: 210-26.
- 酒井隆史, [2001] 2019, 『自由論——現在性の系譜学 完全版』河出書房新社.
- 佐々木晃, 1998, 『ソースタイン・ヴェブレン——制度主義の再評価』ミネルヴァ書房.
- 佐々木隆治, 2016, 『カール・マルクス——「資本主義」と闘った社会思想家』筑摩書房.
- Schatzberg, Eric, 2006, "Technik" Comes to America: Changing Meanings of "Technology" before 1930," *Technology and Culture*, 47(3): 486-512.
- Schmidt, Alfred, 1990, *Heidegger und die Frankfurter Schule: Herbert Marcuses Heidegger-Marxismus*, Peter Kemper hg., *Martin Heidegger: Faszination und Erschrecken. Die politische Dimension einer Philosophie*, Frankfurt/New York: Campus Verlag, 153-77.
- Schoolman, Morton, 1984, *The Imaginary Witness: The Critical Theory of Herbert Marcuse*, New York: Macmillan.
- 芝健介, 2018, 「戦後ドイツ社会とホロコースト認識」『大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター年報』15: 53-59.
- 芝田進午, 1971, 『科学=技術革命の理論』青木書店.
- 新川健三郎, 1972, 「米国の戦時経済体制に関する一考察——軍産複合体の原型の形成」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』32: 49-70.
- Simich, J.L. and Rick Tilman, 1980, "Critical Theory and Institutional Economics: Frankfurt's Encounter with Veblen," *JOURNAL OF ECONOMIC ISSUES*, 15(3): 631-48.
- 清水正徳, 1982, 『働くことの意味』岩波書店.
- 清水多吉, 1973, 「ハイデッガーとマルクーゼ」『現代思想』1(2): 188-203.
- , 1975, 「ある通底穴——ハイデッガーとフランクフルト学派」『現代思想』3(5): 195-205.
- 白石哲郎, 2019, 『社会学理論における文化概念の変遷——文化と社会の相互浸透をめぐるパーソンズ文化理論の今日的意義』ミネルヴァ書房.



- Steigerwald, Robert, 1969, *Herbert Marcuses "dritter Weg"*, Köln: Pahl-Rugenstein Verlag.
- Stockman, Norman, 1978, "Habermas, Marcuse and the Aufhebung of Science and Technology," *Philosophy of the Social Science*, 8: 15-35.
- 杉原四郎, 1973, 『経済原論I——「経済学批判」序説』同文館.
- 杉村芳美, 1990, 『脱近代の労働観——人間にとって労働とは何か』ミネルヴァ書房.
- 住沢博紀, 2002, 「二〇世紀を生きた批判的政治学者フランツ・ノイマン」『日本政治学会年報政治学』53: 105-32.
- 寿里茂, 1968, 「産業社会とテクノクラシー」『早稲田商学』200: 199-226.
- 鈴木亮三, 2008, 「人間の変容と労働——ヘーゲルの労働論を手引きに」『東北哲学会年報』24: 43-58.
- 庄司興吉, 1977, 『現代化と現代社会の理論』東京大学出版会.

## T

- 田上孝一, 2015, 『マルクス疎外論の視座』本の泉社.
- 高哲男, 2004, 『現代アメリカ経済思想の起源——プラグマティズムと制度経済学』名古屋大学出版会.
- 高田純, 1994, 『承認と自由——ヘーゲル実践哲学の再構成』未来社.
- 高田珠樹, 2014, 『ハイデガー——存在の歴史』講談社.
- 高島善哉, 1978, 「生産力理論の問題関心——その射程と基礎視覚について」『経済系関東学院大学経済学会研究論集』116: 1-15.
- 瀧将之, 2014, 「メタ存在論、不安と退屈、自由——『形而上学』の展開」秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』法政大学出版局, 115-24.
- 田村未希, 2012, 「『存在と時間』における現存在の決意性と歴史性について」『東京大学大学院人文社会系研究科・文学部哲学研究室論集』31: 155-168.
- 田中和雄, 2011, 「科学的管理法による統制権の分離・掌握の過程と職業別労働組合の対応」『専修ビジネス・レビュー』6(1): 47-73.
- 田中朋弘, 1995, 「カントの幸福概念——構想力と判断力を手がかりに」『待兼山論叢 哲学篇』29: 57-68.
- 田中智志, 2015, 「存在に向かう思考——ハイデガーの「学び」」『研究室紀要』41: 49-66.
- 田野大輔, 1995, 「ポリクラシーの政治力学——ナチ支配の解釈をめぐって」『京都社会学年報』3: 57-76.
- , 2007, 『魅惑する帝国——政治の美学化とナチズム』名古屋大学出版会.
- 辰巳伸知, 1991, 「ハーバーマスとマルクーゼ——批判理論の規範的基礎をめぐって」『年報人間科学』13: 71-82.
- , 2013, 「初期批判理論の変容」『社会学部論集』56: 59-91.
- Thornhill, Chris, 2000, *Political Theory in Modern Germany*, Polity Press. (=2004, 安世舟・永井健晴・安章浩訳『現代ドイツの政治思想家——ウェーバーからルーマンまで』岩波書店.)
- Tilman, Rick, 1994, "Dewey's Liberalism versus Veblen's Radicalism: A Reappraisal of the Unity of

Progressive Social Thought," *Journal of Economic Issues*, 18(3): 745-769.

- 轟孝夫, 2002, 「ハイデガーにおける労働の概念について」『倫理学年報』51: 95-110.
- , 2014, 「学長ハイデガーの大学改革構想——『ドイツ大学の自己主張』」秋富克哉・安部浩・古荘真敬・森一郎編『ハイデガー読本』法政大学出版局, 125-34.
- 徳永恂, 1974, 『ユートピアの論理——フランクフルト学派研究序説』河出書房新社.
- 徳永恂編, 1980, 『社会思想史——「進歩」とは何か』弘文堂.
- 富沢賢治, 1971, 「レーニンの「労働貴族」論」『経済研究』22(1): 31-38.
- 豊泉周治, 2000, 『ハーバーマスの社会理論』世界思想社.
- 豊田太郎, 2012, 「アメリカにおける労働運動の展開——労働騎士団から AFL-CIO まで」『札幌大学総合論叢』34: 59-71.

## U

- 内田弘, 1993, 『自由時間——真の<豊かさ>を求めて』有斐閣.
- , [1982] 2005, 『新版『経済学批判要綱』の研究』御茶の水書房.
- 内田義彦, 1971, 『社会認識の歩み』岩波書店.
- 上野成利, 1995, 「ホルクハイマー——批判的社会理論の射程」藤原保信・飯島昇蔵編『西洋政治思想史・I』181-198.
- 上杉忍, 2000, 『二次大戦下の「アメリカ民主主義」——総力戦の中の自由』講談社.

## V

- Veblen, Thorstein, 1914, *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts*, New York: The Macmillan Company. (= 1997, 松尾博訳, 『ヴェブレン 経済的文明論——職人技本能と産業技術の発展』ミネルヴァ書房.)
- , 1921, *The Engineers and the Price System*, New York: B.W. Huebsch. (= 1962, 小原敬士訳『技術者と価格体制』未来社.)
- Vogel, Steven, 1991, "New Science, New Nature: The Habermas-Marcuse Debate Revisited," *Research in Philosophy & Technology*, 11: 157-78.

## W

- 鷺田清一, [1996] 2011, 『だれのための仕事——労働 VS 余暇を超えて』講談社.
- 渡辺雅男, 1988, 「統制の戦略——テイラー主義について」『社会学研究』26: 105-140.
- Winner, Langdon, 1977, *Autonomous Technology: Technics-out-of-control as a Theme for Political Thought*, Cambridge: MIT Press.
- Wolin, Richard, 1990, *The politics of being: the political thought of Martin Heidegger*, New York: Columbia University Press. (= 1999, 小野紀明・堀田新五郎・小田川大典訳, 『存在の政治——マルティン・ハイデガーの政治思想』岩波書店.)
- , 2001, *Heidegger's Children: Hannah Arendt, Karl Löwith, Hans Jonas, and Herbert Marcuse*, Princeton: Princeton University Press. (= 2004, 村岡晋一・小須田健・平田裕之訳『ハイデガー

の子どもたち——アーレント/レーヴィット/ヨーナス/マルクーゼ』新書館.)  
——, 2005, "Introduction: What is Heideggerian Marxism," Wolin, Richard and John Abromeit eds.,  
*Heideggerian Marxism*, Lincoln and London: University of Nebraska Press, xi-xxx.

## Y

- 山田有希子, 2019, 「ドイツ観念論およびヘーゲル哲学における『生命』概念——『生命とは何か』  
という問いそれ自体を問いながら」『哲学』70: 106-22.
- 山口正之, 1969, 『マルクス主義と産業社会論』新日本出版社.
- 山口定, 1979, 『ファシズム』有斐閣.
- 山本惇二, 2001, 「シラーの美的自律性思想——その形成と発展をめぐって」梅沢知之他編, 2001,  
『仮面と遊戯——フリードリヒ・シラーの世界』鳥影社, 223-41.
- 山之内靖, 1969, 『マルクス・エンゲルスの世界史像』未来社.  
——, 1982, 『現代社会の歴史的位相——疎外論の再構成をめざして』日本評論社.  
——, 1993, 「戦時期の遺産とその両義性」『岩波講座 社会科学の方法III 日本社会科学の思  
想』岩波書店, 131-70.
- 柳澤治, 2015, 「ナチス・ドイツの戦時経済体制と「手工業」の合理化」『社会経済史学』80(4): 547-  
566.
- 山脇直司, 1992, 『ヨーロッパ社会思想史』東京大学出版会.

## 要旨

本論文はフランクフルト学派第1世代の社会哲学者であるヘルベルト・マルクーゼの管理社会論に代表される社会理論・社会哲学を「労働と遊びの一致としての生命活動」という観点から再解釈することを目的とする。

様々なモチーフ・論点からマルクーゼの理論を体系的に再構成する試みがいくつかなされてきたが、「労働と遊びの一致」をもとにマルクーゼの理論を体系的に描きなおす試みはこれまで行われてこなかった。労働と遊びの一致とは、自然や他者との戯れを通して、新しいものを生成し、世界のなかで自己の存在を確かめていく生命活動を指す。

労働そのもの、とりわけ日々の生活を成り立たせるための労働は、対象と戯れることよりも、対象との闘争であったり、あるいは他者を労働に使役させる主従関係を取り結ぶことを伴う。マルクーゼはこのような労働観を生命の活動であると捉えつつ、その活動が人間に、あるいは対象に大きな負担をもたらすことを見ていた。

労働を通して世界のなかで自らの存在を確証することには大きな負担や苦難が常につきまとう。個々の存在を確証しつつも、その負担をどのように緩和することができるのか。マルクーゼは「遊び」という労働の対概念へ着目することで、対象と戯れつつ日々の必要を満たすための労働をおこなう可能性を考えていく。当初マルクーゼは、必然の労働と自由の労働の区別を前提としたうえで、後者から前者を照射することで、遊びの契機を必然の労働に含有させることを考えていた。しかし、必然の労働と自由の労働がおこなわれる各領域の相互侵食の過程を目の当たりにし、最終的にマルクーゼは、日々の必要を満たす必然の労働をテクノロジーを触媒とすることで自動化し、可処分時間を増やすことによって、人間は科学的発明や実験といった精神労働にのみ従事できるようになるという社会構想にたどり着くのであった。

本論文の第1章では1930年代初頭にかけてのハイデガー期のマルクーゼの諸論文、特に『ヘーゲル存在論と歴史性の理論』『史的唯物論の基礎づけのための新史料』『経済学的労働概念の哲学的基礎』におけるマルクーゼの労働論と遊び論を整理した。30年代初頭、マルクーゼは労働と遊びの一致により生命活動としての「真の労働」がもたらされるという基本的な労働観を固めて以降、その都度の社会状況に応じて、労働や遊びがいかに管理されるようになっていったのかを分析するようになる。

第2章では1930年代後半の諸論文を取り扱った。マルクーゼは、フランクフルト学派帯同期に、生命活動としての労働(=必然の労働)と遊び(=自由の労働)が、禁欲労働(疎外された労働)と仮象文化(疎外された文化)に分化していく様相を描き出す。ドイツからアメリカへの亡命と前後して、マルクーゼはフランクフルト社会研究所で刊行していた『社会研究年誌』にて、諸論文を発表していく。同章では「文化の現状肯定的性格について」「哲学と批判理論」「快樂説批判」を主な資料として取り上げ、自由の労働の成果として生み出されるはずの文化が、必然の労働の苦痛を麻痺させる機能を有すること、そしてそのような状況を乗り越えるための対象との戯れ

に基づく文化の可能性を明らかにした。

30年代中盤の分析は、哲学史的な考察、文化批判的な考察に基づいて行われている。西欧資本主義に基づく市民社会において、生命活動としての労働はプロテスタンティズム的禁欲労働となった。市民社会において遊びは生命活動としての労働から切り離され、対象と戯れる自由を失うとともに、市民社会の芸術文化として位置づけられるようになり、その意味内容を縮減させていく。市民社会の文化は、労働者の禁欲のはけ口となる。労働を禁欲的に耐え忍ばせるための「仮象の幸福」が労働者に与えられ、幸福は個人の精神の充足の問題であるとして片付けられる。市民社会の労働は、毎日必需品をつくりだすはするが、世界内での自己確証の契機を認識できず、剥奪されてしまう「疎外された労働」となる。さらに、ドイツの全体主義的労働国家において、市民社会の文化は労働者を称揚し、国家を支えるための英雄文化へと変化するが、文化によって労働を疎外する機能は変わらない。労働国家において労働は人間にとってのすべての行為を国家や民族を支えるための「奉仕としての労働」と化していく。

この状況を克服するために、マルクーゼは、古代ギリシャ以来、理性よりも低い価値を与えられていた感性に基づく快樂の解放に手がかりを求める。本来であれば、身体が快樂を享受しながら生命活動を充足していくはずであるが、市民社会では身体の快樂は禁欲的勤労主体にとって疎外されたものとなる。禁欲から解放されるには、偶然性のなかで自然や対象と出会い、現実を超える空想の力を媒介としつつ感性の対象にひたむきに没頭することで、賃労働のための身体でなく生命活動のための身体を回復させる必要がある。

第3章では、1940年代前半にかけて書かれた諸論文、特に「現代テクノロジーの社会的意味」と題された論文を資料として扱った。40年代以降、文化によって労働が疎外されるというマルクーゼの洞察は、テクノロジーによって労働が管理されるという洞察へ変化する。哲学史的考察、文化批判的考察に基づくならば、たしかに市民社会の文化や労働国家の文化のイデオロギー性を把握することができる。しかし、マルクーゼが直面していたドイツ社会、あるいはアメリカ社会の状況は、上記の哲学史・文化批判的アプローチだけでは説明をすることができないものとなっていた。とりわけ、テクノロジーによる労働の合理化や効率性の追求がドイツのテクノクラシー社会体制の成立に関与しているとマルクーゼは考えるようになった。生産テクノロジーが社会にどのような影響をもたらすのか。マルクーゼはテクノロジーに内在する思考、行動、本能の方向づけの力に着目しつつ、哲学史や文化批判的アプローチではなく、当時の社会科学を参照点としながら分析をしていく。その際に、マルクーゼはアメリカの産業社会を映し鏡にして、ナチス・ドイツのテクノクラシー体制を照射するという考察の構えを取る。マルクーゼはアメリカ産業社会の現実のなかにナチス・ドイツに流布する技術的合理性を発見したのである。

マルクーゼの議論に基づくなら、テクノロジーの発展により、自由主義的経済の主体が有する個人主義的理性が、大企業の寡占、生産テクノロジーの独占、新しい生産様式の普及に伴い、技術的合理性に変化していく。個人の理性は、テクノロジーに効

率的に適応するためだけの理性に切り詰められていく。そのような状況で、人間の本能、思考、行動パターンもテクノロジーに委ねられるようになる。さらにマルクーゼは、技術的合理性の展開と並行して、急速に発展する科学技術の動向を反映した労働形態の変化を見ている。たとえば、マルクーゼは科学的管理法に基づく職業訓練や労務管理を批判している。マルクーゼの「労働と遊びの一致」という観点からすると、科学的管理法は人間を取替可能な労働のための道具にし、生産性や効率性で労働を測定してしまうような技術的合理性の象徴であり、労働者が主体的にルールを設定し対象と戯れる契機が入り込む余地はそこにもはや存在しないのである。

続けて第4章では、マルクーゼによって著された1940年代前半のナチス・ドイツの政治分析レポートを資料とし、ドイツ・テクノクラシー体制の展開をマルクーゼがどのように記述していたのかを検討した。前述のとおり、マルクーゼはテクノロジーの本質を技術的合理性に見出した。この基本的な枠組みに依拠しながら、マルクーゼはナチス・ドイツにおけるテクノクラシー体制の展開を分析する。特に、技術的合理性を支える政治構造と経済構造のアマルガムをマルクーゼは本格的に研究するようになる。

さらに、第二次世界大戦後の管理社会論の展開にあたっては、1950年代のオートメーション論の流行がひとつの背景となる。この点については第5章で50年代以降のマルクーゼの著書を資料として検討した。第二次世界大戦後、オートメーション・テクノロジーが急速に普及するなかで、マルクーゼの労働観はさらに深化していく。先の科学的管理法批判を踏まえると、マルクーゼは、労働者がベルトコンベアの流れ作業で効率的に仕事をこなし、そうすることで快楽を覚えるという「熟達本能」を批判している。また、ソ連の生産性向上運動を事例として取り上げつつ、生産性信仰や労働道徳を批判している。オートメーション・テクノロジーを労働と遊びの一致のために効果的に用いるには、生産性信仰や労働道徳からの解放が必要となる。

終章は本論文の結論となる。マルクーゼはその初期において、ヘーゲルや初期マルクスの労働論に依拠しながら、自然などの対象と戯れるような遊びが、闘争を通して対象を自己の生命に取り入れる労働の負担性を緩和するには必要であると考えようになる。他方、労働と遊びは、身体を拘束する禁欲労働と、精神を拘束する市民文化に分極していく。マルクーゼはこの分極を統合する鍵をテクノロジーに求める。特にオートメーション・テクノロジーが普及することで、人間の苦役労働が最小限になり、可処分時間が増大し、人間の「真の労働」が達成されると考えるようになる。そのような労働はものを産み出す快楽を伴う「遊び」となる。人間は科学にもとづいて対象と戯れる実験や発明に勤しみ、人間の自由が達成される。上記を達成するためには、労働を生産性追求の観点から捉える見方を克服する必要があった。この見方が、労働国家を支える禁欲的な労働を成り立たせていたのである。